

カグラマツリ……(2)

社務所の玄関に置いてある電話が鳴った。電話の音は一帯に響いていた。

「はいはい、今お待ちを」

奥から禰宜が駆けつけてきた。禰宜は20代で、白い小袖に青い袴を履いていた。

禰宜は電話台に来ると、乗っている電話の受話器を手に取り、耳にあてた。「もしもし」

受話器のスピーカーから、驚き混じりの吐息が聞こえた。『もしもし、こちらは父符警察署の霧崎と申します』

「警察の方ですか」禰宜は驚いた。「あの、神楽殿で子供が入り込んだ事についてですか」

霧崎の唸る声が聞こえた。

「あの」禰宜は警察に確認を求めた。何も返事がないのであれば、思いつく要件は何だというのか。

「ゲーゴルという人に連絡を取ろうと彼の自宅に電話をしたのですが、こちらにいと聞きまして。確認の為に電話したのです」

「ゲーゴルさんに、ですか」

「はい」

「分かりました。今境内にいますから、呼び出します。暫くお待ち下さい」禰宜は、受話器を電話の隣に置き、玄関においてある靴を履いて外に出ていった。

境内では氏子達が祭りの準備をしていた。ゲーゴルの元に氏子が集まっていた。ゲーゴルはスケジュールの書いた紙を見ながら、氏子に指示を出していた。

禰宜は、ゲーゴルの元に近づいた。「ゲーゴルさん、警察から電話が入っています」

「警察からとは物騒ですね。何用ですか」

「特に何か用と言いますか、連絡が取りたいと」

ゲーゴルは禰宜の言葉に首を傾げた。警察が確認したいというのは、子供が森に入った事位しかないが、何故に自分なのだろうか。神社の外にいる人間が森について事情を知っていると思えない。神社や場所についてなら、禰宜の方が詳しいからだ。

「スンズンではなく、私を指定しているのですか」

禰宜は頷いた。「ええ」

「社務所の電話ですね、行ってみます」ゲーゴルと禰宜は社務所に向かい、ドアに手を開けて開けた。鍵はかかっていなかった。

ゲーゴルは靴を脱いで土間から床に上がり、受話器を手を取った。「もしもし、ゲーゴルです」

『父符警察の霧崎と言います。ゲーゴルさんですか』

「はい、その通りです。ご用件は何ですか」

『神楽殿について調査をしていたのですが、追っていくうちに15年前に神楽殿で事件があるのが分かりまして』

霧崎の言葉にゲーゴルは陰しい表情をした。15年前に神楽殿で起きた事件と言えば、謎羅が死んだ事件以外にない。

「祭りの途中で亡くなった件ですか」

『ええ。今回起きた事件と関係あるのではないかと思います、連絡したのです』

「15年前なら、神社にいる人間の方が詳しいかと思います」

『その通りですが、事件の当事者は悲劇から避ける傾向があり、証言も曖昧になりがちです。ですから近い立場の人から聞く方が確実かと判断しています』

「なるほど、納得です」ゲーゴルは頷いた。「父符教会と言うのはご存知ですか」

『教会、ですか』

「私の家です。地図にも載っているはずですから行けるはずですよ。そこで資料を元に話をします」

『資料があるのですか』

「はい」

『ありがたい話です』

「今すぐ準備する必要がありますから、切ります。よろしいですか」

『父符教会ですね』

「そうです」

『分かりました』

ゲーゴルは受話器を持ったまま、電話の白いフックを押した。電話が切れた。

「あの、警察からの用と言うのは」禰宜は、ゲーゴルに尋ねた。

「15年前の出来事について調べているので、話を聞きたいと言った程度です。出頭しろという訳ではないので何も問題ありません」

「そうでしたか」

ゲーゴルはダイヤル穴に指を入れて回し、電話をかけた。

受話器から呼出音が鳴った。暫くして呼出音が切れた。『ももし』甲高い女性の声が出た。

「ももし、私です。ミリアですか」

『ああ、ゲーゴル』受話器のスピーカーから、安堵の息が聞こえた。『さっき、電話で警察の人が電話出てね。神社に回してって言うておいたのよ』

「電話が来ました」

『ええ。警察に逮捕されるのデスカ』

「違いますよ。私が GHQ と共に捜査していた件について調べているようです。家で警察の方と話をします。物置にある1951年と書いた資料を適当に居間へ運んできて下さい」

「どんな物でもいいの」

「構いません。無理なら無理でもいいのですが」

『分かったわ』電話が切れた。

ゲーゴルは受話器をフックに掛け、禰宜の方を向いた。「私は今から我が家に向かわねばなりません。私は自分の車で家に行きます。センチに戻る時にはタクシーを呼ぶよう言って下さい」

「はい」

「宜しく頼みます」

ゲーゴルは土間で靴を履くとドアを開けて社務所を出て行った。

禰宜はゲーゴルの後を追うように、土間においてある履物を履くと外に出た。ドアを閉めた。

禰宜は、境内にいる氏子の元に向かった。「失礼します。ゲーゴルさんの娘さんが居間何処にいるか教えてくださいませんか」

「彼女なら、樹沙羅様と共に集会所に行ったよ」氏子は気さくに答えた。

「ありがとうございます」禰宜は礼をした。

氏子達も禰宜に合わせて礼をした。

禰宜は集会所に向かい、ドアを開けて中に入った。玄関からフローリングの廊下が延びていた。廊下の脇にドアがあり、開っ放しになっていた。先のホールから雅楽や足音、ざわめきが聞こえていた。

禰宜は履物を脱ぎ、ホールに入った。軽いスポーツが出来る程の広さがあった。村の女性達が集まり、小道具の整理をしていた。

京は丈の短い白いワンピースを着ていて、ホールの端で扇子を広げて舞を踊っていた。樹沙羅は中年女性と共に京を指導していた。センチは二人の様子を見ていた。隅に置いてあるレコードプレイヤーから雅楽が流れていた。

樹沙羅は京の腕を取った。「そんなのじゃ、次の動作に入りにくいわよ。ちゃんと伸ばして」樹沙羅は京の腕を掴み、伸ばした。

中年の女性は樹沙羅に近づいた。「このままでいいのよ、余計な事をしないで」

「余計も何も無いわよ。これじゃあ動きが無駄が多くなるわよ。今までこんなやり方をしていたの」樹沙羅は中年女性に食って掛かり、レコードプレイヤーに近づくと針を上げた。プレイヤーから音が消え、レコードは回転を止めた。

京は呆然とした状態で、樹沙羅の様子を見ていた。

センチは禰宜に気づいた。「揉め事ですか」

「樹沙羅お姉様が何かにつけて振りがおかしいと言いだしまして」

「樹沙羅様は直接宮司から教えてもらっているのに対して、京様は樹沙羅様が出ていった為に急遽舞を披露するハメになったのです。樹沙羅様の目からすれば付け焼き刃でしか見えないので、厳しくなるのも仕方ありません」

「付け焼き刃、ですか」

「軽く教えてもらった程度、という意味です」

「へえ」センチは、禰宜の言葉に納得した。

樹沙羅は京の元に近づいた。「他に舞が出来る人がいないのは分かるけど、どうして突然あの神楽殿でやる事になったの」

「え、ええと」樹沙羅の質問に、京は戸惑った。「分かりません」

樹沙羅は、京の返事に頷いた。分からないものは分からない。当然と言えば当然だ。

「分かったわ。あのね、京。練習の時もそうだけど、舞の時に気分が悪くなったら無理しないで降りなさい」

「降りるって、止めるって事」

「そうよ。無理して続けても死ぬだけ。昔、私の母様がそうだったの」

「叔母様は舞をしてる時に死んだの」

「そうよ、15年前に神楽殿でね。慣れない運動をすると心臓まひを起こすって言うから」

京は不安げな表情をした。

「樹沙羅、京を脅かす物じゃありません」中年女性は、樹沙羅の間に割って入った。

「大丈夫よ、普通に体を動かしている分には問題ないから」中年女性は、京にやさしく声を掛けた。

「ずっと、あの調子ですか」禰宜はセンチに尋ねた。

センチは不快な表情をした。「樹沙羅お姉様、遊びに行かないでずっとああなんですよ。神楽の舞は重要なのは知ってますけど、入れ込みにも程があります」

「祭りと言うのは重大です。この土地の存亡に関わるのですから」

「存亡って、祭りに凄い力があるのですか」

「神楽は大地を鼓舞し、活気を与える儀式です。でなければ今に至るまで続いていません」

「凄い儀式なのは分かるけど、神楽殿で踊っているのを見た事ないわ」

「込み入った事情と言う物がありますから」

「事情、ですか」

「ええ。あのですね、お父さんですが警察と話をすると行って家へと向かいました。ですから、家に戻る時はタクシーを使うようにとの事です」

センチは、警察の言葉に驚いた。「パパが警察に」

「いえ、警察と言いましても犯罪を犯した訳ではないです。以前あった事情で調べたいのだと仰っていました」

「事情と言いますと、子供が戻ってこない件ですか」

「いえ、15年前について、聞きたい事があるのでと仰っていました」

「15年前」樹沙羅は驚いた。「15年前って、神楽殿で母様が帰幽した時の」

「はい。15年前と言いますと、丁度警察の管轄が変わった頃です。資料が散財している可能性もありますから、関係者から改めて聞こうとするのも無理はありません。今更になって掘り返す理由が良く分かりませんが、個人的な興味なのでしょう」

「個人的な、ですか」

「既に終わった事ですから改めて調べた所で、何も出ないでしょう」

樹沙羅は、禰宜の言葉に苛立った。15年前の事件はまだ決着していない。

「既に終わっているなら、どうして今更聞き出そうとするのよ」

「私に言われても分かりません。警察側にしかない何かがあったからでしょうか」

樹沙羅は、禰宜の適当な言葉に呆れた。何も出ないと言っておきながら何かがあったとはどういう意味なのか。

ひょっとして、15年前の事件の真相に関わるものを見つけたのではないのか。

「樹沙羅さん」京は、心配そうに樹沙羅に声を掛けた。

「ああ、そうだったわね」樹沙羅は京の頭を撫でた。

「続きは貴方が教えるの」中年女性は、樹沙羅に尋ねた。

樹沙羅は首を振った。「いえ。今、用が出来たから後で教えるわ。今はお願い」

「随分、適当なのね」

「仕方ないじゃない、用が出来たんだから」

「もう」中年女性は呆れた。子供というのはなんと気まぐれなのか。

「じゃあ、後でね」樹沙羅は京に声をかけた。

京は頷いた。

樹沙羅は、禰宜の方を向いた。「タクシーの連絡先って分かる」

「タクシーですか」禰宜は、樹沙羅の質問に驚いた。「まさか、話を聞きだそうと言うんじゃないですか」

「当然でしょ」樹沙羅は毅然とした態度で言った。「曲がりなりにも身内なんだから、無関係じゃないでしょ。むしろこっちから出向いていく方が向こうにとって好都合じゃない」

禰宜は、樹沙羅の話に押され、眉を顰めた。言う事は確かにその通りだが、当時はまだ1歳で物心はない。いくら身内でも自我のなかった人から話を聞き出そうと考えるだろうか。

樹沙羅はセンチの方を向いた。「センチ、今から貴方の家に行くわよ。貴方も、私の家に遊びに行こうって言ってたわよね」

センチは、樹沙羅の言葉に驚いた。「え、ええ」

「なら、全部解決済みじゃない。タクシーに連絡して。ここを離れてたんだから、分からないのよ」

「樹沙羅様、駅でタクシーに連絡したんじゃないのですか」

「止まっていたのを拾っただけよ」

禰宜は呆然となった。「はい、分かりました。私が電話をかけます」

「ありがとう。ゲーゴルさんの家にこれから行くからって連絡を入れておいて」

「ゲーゴルさんの家ですね。お金は」

「大丈夫、まだ財布にあるから」

「足りなかったら、私が家から出します」センチは、禰宜に言った。

「分かりました」

「私達は参道の道路で待ってるから」樹沙羅はセンチの手を取った。「ほら、今すぐ行くわよ」

センチは禰宜の方を向いた。「パパはいつ出たんですか」

「先程出ました」

「なら、まだいるかも知れません。駐車してる原に行きましょう」

「あの、タクシーは」

「一応呼んどいて」

「来たらいなかったなんて事態になったら、どうしたら。」

「後で謝りの電話をすればいいだけじゃない」

「私が電話するのですか」

「当然でしょ」

禰宜は樹沙羅の言葉に愕然となった。いい加減にも程がある。

樹沙羅は京の方を向いた。京は呆然とした状態で樹沙羅を見ていた。「続きは戻ってきたらね」

「う、うん」京は曖昧に返事をした。

「行きましょ」樹沙羅はセンチを連れてホールを出ていった。

「忙しいと言うか、自分勝手と言うか。今時の人ってそんなものなのかね」中年女性は呆れ気味に言った。

「樹沙羅様だけだと思います。私はタクシー会社に連絡を取りに行ってきます」禰宜は踵を返して集会所を出ていった。

「あの、私は」京は首を傾げた。

「私が教えるわ」中年女性はレコードプレイヤーの元に向かった。針をレコードの音溝に動かした。レコードが周り、音楽がスピーカーから、若干のうねりが混じった状態で流れた。

樹沙羅とセンチは境内を抜け、山道を走って道路に出ると、道路から歩いて車が止まっている原に来た。ロゼッタ状の草が密生している代わり、茎が伸びている草はなかった。車がよく止まっているのか、草が生えずに茶色の地が出ている箇所があった。車は3台止まっていて、端が曲線に鳴っている以外は直線的な輪郭を持っていた。

樹沙羅は止まっている車を確認した。「ゲーゴルさんの車、ある」

「ありません。もう出ていったんでしょね」

「そうなんだ、じゃあ参道前で待つしかないね。連絡してくれればだけど」

「やるかやらないか疑うなら、自分で連絡すればいいのに」

「分からないからしょうがないでしょ。参道前まで戻りましょ」

「う、うん」

樹沙羅はセンチの手を取った。

センチは樹沙羅に連れて行かれる形で参道前に向かった。車通りはなかった。参道前の十字路も車が来る気配がなかった。

「そうそう来る訳無いですね」

「どれくらい待つか、聞いてこようか」樹沙羅は、センチに尋ねた。

「その間に来たらどうするんですか」

「そうよね」樹沙羅は、センチの言葉に頷いた。

暫くして十字路の先から、青いタクシーが来て、樹沙羅の前で止まった。運転席のドアが開いた。運転手は車を降り、後部座席のドアを開けた。「どうぞ」

「随分、早いわね」樹沙羅は、タクシーの運転手に尋ねた。

「近くで無線が入りましたから」
「無線って、便利ね。私達も使えれば便利なのに」
「大きすぎて持ち運べませんよ」
「言われてみればそうね」

樹沙羅とセンチは後部座席のドアを開け、タクシーに乗った。運転手は後部座席のドアを閉め、運転席に座ると運転席のドアを閉めた。

「何処までですか」
「父符教会までお願い」
「父符教会。大通りですか。はい分かりました」
運転手はギアを入れ、アクセルを踏んだ。タクシーが動き出した。

パトロールカーは、高架線を越えた所にある駐車場に入った。駐車場の前に掲示板が立っていて、教訓らしき言葉が書いてある紙と説教のスケジュールが書いてある紙が貼り付けてあった。

運転席に乗っている霧崎は、教会の礼拝堂と奥にある住居を見た。礼拝堂は白く、奥に向かって細長い構造になっていた。屋根は赤く、天辺に白い十字架が立っていた。洋風の赤いブロックの壁をした2階建ての家が、礼拝堂の影に隠れるように建っていた。家の前に新聞受けを兼ねたポストが立っていた。

ゲーゴルは2時間後と答えたが、霧崎はいても立ってもいられずに教会まで飛ばしてきた。

パトロールカーは駐車場の空いている場所に前向きで止まった。

霧崎はサイドウィンドウから駐車場を見た。4、5台程止まれるスペースで、車は1台も止まっていなかった。

霧崎は車を降り、礼拝堂奥にある家に向かう途中で礼拝堂を見た。礼拝堂に窓はなかった。

霧崎は家の前に来た。ドアの脇に呼び鈴のボタンがあった。霧崎はボタンを押した。「すみません、父符警察の霧崎です」

暫くしてドアが開き、ミアアが出てきた。ふくよかでウェーブのかかった肩まである金髪をしていた。「はい、ケーサツの方ですか」

霧崎はミアアの姿に驚いた。肌の白い外国人を実際に見た経験がなかった。特に自分より背が高く、同僚より体格が良い女性というのは見た事がなかったので尚更だった。

「あの、何か付いていますか」ミアアは、霧崎に尋ねた。

霧崎は我に返り、勢い良く首を振った。「いえ。電話をしました、父符警察署の霧崎と申します」霧崎は冷静を装い、改めて自己紹介をした。

「ああ、夫のゲーゴルから話を聞いています。私はミアアと言います」

「夫はもう中に入っていますか」

「いえ、戻ってきていません」ミアアは首を振った。

霧崎は頷いた。父符警察から離れた神社にいるのだ。自分より時間がかかるのは当然と言える。

「そうでしたか、電話を受けてから来るようにと言われまして来たのですが、どうやら早く来すぎたようです」

「問題ありません。迷惑でなければ家で待っていてはどうでショーか」

「大丈夫です」時間まで外で待ちます」

「大丈夫なら、家で待っていればいよいよと思ひマス」

霧崎は、ミアアの返答に眉を顰めた。大丈夫という言葉、構わずとも良いという否定の意味ではなく問題ないという了承の意味で受け取ってしまったのだ。

「大丈夫という意味は、はいという意味ではなくてですね。ええと、時間は自分で潰せますからお気遣いは結構ですという意味でして」霧崎は、ミアアにたどたどしく説明した。外国人に日本語の解釈を説明するのは面倒だ。

「結構なら、家に入ればいいでしょう」

「結構というのは、不要ですという否定の意味でしてね」

ミアアは眉を顰めた。「そうでしたか。日本語というのは難しいですね」

「ですから、車の中で待っています。ゲーゴルさんが来ましたら外でお会いしますので」

「はい」

霧崎は礼をした。「お気遣い、感謝します」霧崎は踵を返し、パトロールカーに戻った。

ミアアは、不思議そうに霧崎の姿を見るとドアを閉めた。

霧崎はパトロールカーに戻り、運転席のドアを開けて中に入った。

霧崎は運転席に座り、目を閉じて何度か深呼吸をした。次第に意識が沈んでいった。

暫く経った。霧崎はガラスを叩く音で意識が戻り、目を開けた。

サイドウィンドウに、車内をのぞき込んでいるゲーゴルの姿があった。

霧崎は驚き、サイドウィンドウの下についているレバーを回して窓を開けた。

「あ、すみません。眠ってしまったようで」

「いえ、こちらこそ先ほど戻ってきたばかりです」

「ドアを開けます。下がって下さい」

霧崎はレバーを回して窓を閉め、ドアを開けて運転席から出た。「失礼しました。改めて父符警察署の霧崎と言います」

ゲーゴルは頭を下げた。「父符教会で牧師をしています、ゲーゴルと申します」

「随分と日本語が堪能なのですね」

「ありがとうございます」

霧崎は車のキーを抜き、車のドアを閉じてキーをキー穴に入れて回した。

「失礼ですが教会の方は、皆結婚していないと思っていました」

「私は牧師ですから結婚出来ます。結婚出来ないのは神父です」

「別なのですか」霧崎は驚いた。宗教に疎い霧崎にとって、神父も牧師も同じだと思っていた。

「何故そうなのかは長くなりますので、そういう物だと思って構いません。貴方はそのような話を聞きに来たのではないのでしょうか」

「確かにそうです」

「では、中に入りましょう」

ゲーゴルは家に向かった。

霧崎は、ゲーゴルの後をついていった。「こちらから来ると言っておきながら寝てしまいまして、本当に申し訳ありません」

「睡眠は、時間を潰す最も合理的な方法です」

「はあ」霧崎は曖昧に返事をした。

ゲーゴルは家のドアに手をかけて開けた。玄関は新しい洋間で、突き当りに電話台と電話が置いてあった。

「個人で電話を引いたのですか」

「GHQと連絡を取る必要がありましたからね」

「GHQの関係者だったのですか」

「後で話します」ゲーゴルは靴を脱ぎ、土間から床に上がった。「どうぞ、中へ」

「はい」霧崎はゲーゴルにならい、靴を脱いで床に上がった。

ゲーゴルは廊下を歩き、居間のドアに手をかけて開けた。

掃き出し窓から光が入り込んでいた。中央のテーブルにはテーブルクロスが敷いてあり、片手で持てるほどの大きさの段ボール箱が2、3個置いてあった。

「どうぞ、お座りください」ゲーゴルは、ドアの方を向いた。「ミリア、客人です。コーヒーを持って来てください」

「はい」遠くから声がした。

ゲーゴルはドアを閉めてテーブルの中央に来ると、椅子を引いて座ると段ボール箱を手にとって開けた。

霧崎は、椅子を引いて座った。「15年前、神楽殿で巫女が亡くなったと聞いています。詳細を教えてください」

ゲーゴルは段ボール箱から、古いノートを取り出して開いて霧崎に見せた。「当時の調査メモです」

霧崎は覗き込んだ。ノートは英語で書き込んであり、現場のものと思われる白黒写真が貼ってあった。

ゲーゴルは、霧崎の表情を見て笑みを浮かべた。「読めませんか」

「英語というのは、どうにも苦手です」霧崎は渋い表情をしてゲーゴルを見た。

「私も日本の言葉は読めません。周りの人間に助けてばかりです。ですから日本の言葉で訳す事は出来ません」

ゲーゴルは、霧崎の手元にあるノートを引き寄せた。

「個人的に調査をしていたのですか」

「GHQに従軍していました。宗教関連と言う事で、私も同行し調査したのです」

「GHQですか」

「ええ」ゲーゴルは頷いた。「私はアメリカにいました。戦争が始まる前に日系の方が信仰者にいましてね。彼を通して日本の文化というものに興味がありました。母国から日本に渡る軍の従軍者募集の知らせがあった時、タイミングが良いとして志願してきました。自分の我儘で来たようなものですから、妻には迷惑をかけました」

霧崎はゲーゴルを見て感心した。アメリカから日本と言う僻地に来ると言うのは、さぞかし大変だっただろう。「日系の方はどうなりましたか」

「戦争の折、隔離されました。今はどうなっているか知りません」

霧崎は渋い表情をした。気まずい質問をしたと気付いた。

「別れを気にする必要はありません。当時はそういう物です」ゲーゴルは、霧崎を気遣った。「15年前の当時はGHQが警察の代わりとして機能していました。先程も言ったように、宗教的な文化と言う面でアドバイザーとして共に調査に当たりました」

「この資料はGHQに渡らなかったのですか」

「個人的な資料というのがありますが、調査の纏めを行っている最中に管轄が日本の警察に移行しました。混乱から資料の返却も押収もなくそのままになったのです」

ゲーゴルは段ボール箱の中を漁るようにいじり、ファイルを取り出すと霧崎に差し出した。

「検死の結果、巫女であった宮司の妻は急激な運動による心臓麻痺で死亡したのが判明しています」
「知っています。調査資料で見ました」霧崎はゲーゴルの言葉に返した。「私が知りたいのは、森と神社との関係です。今回子供が入り込んだ件と15年前の出来事との関連性があるのではないかと考えています。が、どうにも離れているようですね」

「森と神社とは不可分です。祭りも、森に関連しています」

「何かしらの力がどういうものですか」

「ええ」ゲーゴルは頷いた。「宗教施設とは特定の存在を崇める施設であると同時に、領域を制圧して守る拠点として建てられる事もあります。神社も例外ではありません」

霧崎は眉を顰めた。ゲーゴルの言葉の意味が理解できなかった。

「八想神社とは森を守るために建てられた神社あり、イベントも森に関連しているケースがほとんどです」

「森を守る、ですか」

「神楽祭りは結界の大本となる大地の力を鼓舞し、維持し続ける為に行われてきました。森には神社や村にとってま
ずいものがあるのでしょうか」

「伝承によれば、あそこには怪物の死体があると聞きました」

「私も聞きました。しかし、誰一人として立ち入ったものがないので実際に見たものはいません。仮に死体があったとしても既に腐食して骨になっているか。そうでなくとも動物に食われて跡形もなくなっているはず。死糞化しているというのがありますが、保管状態が特殊な場合に起こりうるものであり、野ざらしになっている死体そのまま残っているとは私にはとても思えません。まして数百年経っても腐食していると言うのは考えられません」

霧崎は、ゲーゴルの話に相槌を打った。「では、別の何かがあると」

「そうしか考えられません。あるいは意図的に隠しているかです」

「隠している、ですか」

ゲーゴルは頷いた。「大抵の伝承というものは、事実に色と何かしらの教訓を足して存在します。外して残った事実から物事を突き止めると言うのが考古学や民俗学の基本です。しかしながら、この場合色と教訓の部分が何処にあるのか不明です」

「そうですね」霧崎は頷いた。結界や瘴気といった胡散臭い物が事実として存在する。となれば何処までが嘘で何処までが事実なのか分からないのも当然だ。

「子供が入り込んだという記録はありますか」

ゲーゴルは首を振った。「いえ。逆に近づけなかったようです」

「近づけなかった」

「ええ。終戦後GHQの統制で、日本的なイベントは全て中止されました。その間大地の力が弱まり瘴気が漏れ出し
周辺の草木や作物が枯れていきました。挙句には森の近くに住む者が病に倒れる者が現れました」

ゲーゴルは、段ボール箱からアルバムを取り出して開き、霧崎に見せた。白黒写真で枯れている作物や、やせ細った年寄りをおぶっている農民の写真があった。

「現に、今でも森近辺には誰も住んでいません。避難したのです」

霧崎は、写真のうち農民達の足元を見た。足元に生えている草は白黒写真であるが、みずみずしさがなくなり枯れているのが分かった。

「私は気力を起こすのが重要と上層部と交渉しました。GHQは1度だけという条件で神楽祭りを起こしました」

「その結果が、宮司の妻の死だと」

ゲーゴルは頷いた。「以降は結界が復活し、瘴気は止まりました」

「では何故、子供が復活した結界を越えて入れたのですか」

「結界というのは自然に発生したのではなく人が意図的に条件を付け、そぐわないものを排除する仕組みで成立します。仲間内にある暗黙の了解を知らないが故に仲間外さになる。ああいう漠然としたものです」

「答えになっていない気がします」

「結界を越えるには、漠然としたものの条件に照合している場合があります。質問に対する答えのようなものです」

ドアが開いてミアが入ってきた。ミアは盆の上に湯気が立つコーヒーの入ったカップと、鮮やかな色のついたクッキーを入れた皿を持っていた。

「話中、済みませんデス」ミアはテーブルの前に来ると、中央にカップと皿を置いた。

「いえ」霧崎は頭を下げた。「家族で日本に来られたのですか。随分苦労したのではないのでしょうか」

「ゲーゴルは日本に興味がありましてね。一人でも行くと言うので二人で来たデス」

「日本語は通訳やスズン、神社の方ですね。その他多くの人に教えてもらいました。調査が終わった折、帰ろうと思ったのですが娘が生まれた直後でしたから、そのまま日本に残る事にしました」

「本当にタイミングが悪いデス。でも皆優しいですし娘は適応シテマスから、良かったとは思っています」

「そうでしたか」

ミアは、ゲーゴルの方を向いた。「警察が来る前にネギから連絡が有りました。センチが樹沙羅を連れて帰ってくるそうです」

「樹沙羅を連れて、ですか」

「樹沙羅。宮司の娘さんですか」

「よく知っていますね」

「はい」

「調べました」

「ケーサツとは、抜け目ないデス。小言も言えません」ミアは笑った。礼をし、部屋から出ていった。ドアが閉まった。

「宮司の娘ならば、詳細な話を知っているのではないのでしょうか」

「確かに、知っていそうですが推測でしか過ぎません」

「現実的ですね」

ゲーゴルは、霧崎の言葉に笑みを浮かべた。「そうですね。ロマンチストと言われます」ゲーゴルはカップを手にして中のコーヒーを飲んだ。

「連絡が来たのが来る前ですから、そろそろ来る時間でしょう」

霧崎は、ゲーゴルの話に興味を持った。宮司の娘に会えれば、神社について詳細な話を聞ける。

「話を戻します」ゲーゴルは、皿にあるクッキーを手に取り、割ると片方を霧崎に差し出した。「どうぞ、お食べください」

霧崎はクッキーを受け取った。僅かに暖かかった。

「毒は入っていません」

霧崎はクッキーを食べた。柔らかめで、噛み砕く度に甘味が染み出してきた。

「この欠けたクッキーを元に戻すのは、欠けた部分をパズルのようにはめるしかありません。しかし、欠けた部分はあなたが食べてしまいました」

「食べてくださいと言ったからでは」

「結界も同じです。片方に対して片方を失った以上、当てはめる事も戻す事も出来ません。しかし、たった一つだけクッキーを合わせる方法があります」

「何ですか」

ゲーゴルは欠けたクッキーを手で削り、皿に置くと別のクッキーを取り出して割った。割ったクッキーも欠けたクッキーのように手で削った。ある程度平たくなった処で、欠けたクッキーと割ったクッキーを合わせた。わずかにずれがあるものの、元の形に近い状態に合わさった。

「こういう事です。互いに合わせるように削り込まれれば、たとえ全く違うものでも擦り合わせは可能です。神楽祭りが15年間中断していた為に削られた結界と、順応性の高い子供の霊力がち合ってしまったものと見えます」

霧崎は、渋い表情をした。結界がどうであれ、子供が中に入ったと言うのは朝に聞いた話だ。堂々巡りだ。

呼び鈴が鳴った。

「随分早いですね」

「ああ、待って下さい。私が出ます」霧崎は、席を立った。

「大丈夫です。ミアが対応します」

ドアの向こう側から、駆けてくる力強い足音が響いた。

居間のドアが開き、樹沙羅とセンチが現れた。

「おじ様、こんにちわ」樹沙羅は、快活な声で言った。

センチは、霧崎とゲーゴルが対面している状態を見て、重い話をしているのだと察した。警察と対面しているというのはよほどの事態だ。

「済みません、警察の人と話をしている時に」

「気にしないでいいよ」霧崎は気さくに言い、樹沙羅の方を向いた。樹沙羅と霧崎の目が合った。「確か、君は宮司の娘だったね。神楽殿や周囲の森について、知っている事はないかな」

樹沙羅は霧崎の質問に面喰らった。自分も警察から話を聞きだそうとしていたが、出会ってすぐに質問されるとは思ってもみなかった。「森、ですか」

ゲーゴルは頷いた。「森に入った子供について、何としてでも助け出したいようでした」

樹沙羅は眉を顰めた。「いえ。子供については何も。元々遠くの学校の寮にいて、戻ってきたばかりだから何も分からないわ」

霧崎は渋い表情をして、冷めてぬるくなったコーヒーを飲んだ。熱さがぬげ、単に渋い味がするぬるま湯でしかなかった。

「15年前に母様が帰幽した事なんだけど、何か理由がある気がするの」

ゲーゴルは、段ボール箱からファイルを取り出して開いた。

「神楽祭りが行われる前、瘴気が森から漏れていたのは知っていますね」ゲーゴルは、樹沙羅に尋ねた。

樹沙羅は頷いた。

「ええ」

「神楽殿は森に有ります。となれば、神楽祭りは瘴気が漏れている中で行われました。体が弱っている人間を瘴気に当てれば、死ぬのは必然です」

霧崎は、ゲーゴルの話に目を丸くした。態々体を壊す場所で運動をすると言うのは、死ねと言っているのも同然だ。

「母様は最初から分かっていた」樹沙羅はつぶやいた。母様は、全部知った上で神楽祭りに望んだと言うのか。

「そんな、自殺行為ですよ」センチは強く言った。

「子供が生まれたばかりだぞ、死を選ぶ訳がない。意図的に舞わせるよう仕向けた者がいるんだ」霧崎は、思わず声を荒げた。

樹沙羅は霧崎の言葉に黙っていたが、体が僅かに震えていた。明らかに動揺していた。

ゲーゴルは、段ボール箱から紐で綴られた書類を取り出して開いた。

樹沙羅と霧崎は、書類を見た。神楽の内容と関わる人間の分担が載っていた。

「最初から、彼女が舞う事になっていたのか。主催が宮司だから、事情を知っているのは確かか」

「そのようです」

「なら、どうして逮捕するなり取り調べるなりしなかったんだ。こうなる事が分かっていたら、立派な殺人だ」霧崎は強く言った。

「そんな、無理ですよ。仮にそうだとしても、証拠の立証なんて出来ませんよ」センチは、霧崎をなだめた。

「神楽祭りは、大地の力に呼应しやすい八想家の血が強い女性が舞をするしきたりがあります。神楽祭りをやると決まった以上、直系の母様が舞うのは避けられません。父様もしきたりに従って決めていただけではないでしょうか」

「でも、今回は別ですよ」センチは樹沙羅に尋ねた。

「私が遠くの高校に行ったからよ。直径がないんだから仕方ないでしょ」

「元はと言えば、イベントの続投を訴えた私に非があります」ゲーゴルはため息を付いた。「事態がどうであれ、祭り以前と祭り以降の結界の性質が変化したのは確かです」

「変化した」

「15年前は瘴気が漏れていました。他の存在を否定し自身の色に染めていたといえます。今回は逆に漏れていない代わりに、外の者を取り込んだのです。性質が変わったのは15年前の神楽祭り以降です」

「神楽祭りで結界が変わった。クッキーの割れ目を削ったとなれば、すり合わせる手段も知っているはずだ」

「でしょうね」ゲーゴルは頷いた。

「クッキー」センチは、皿に乗っているクッキーを見た。

ゲーゴルは笑みを浮かべた。「こちらの話です」

「死んだ謎羅の夫、宮司が全てを知っている。結界の破り方、森の入り方の全てを。これで分かった」

霧崎は立ち上がり、樹沙羅を見た。樹沙羅は僅かに俯いた。「一緒に来てくれ」

「方法を聞き出す気ですか」

「当たり前だ」

「無理矢理話させた言葉に真はありません。自らの意志で話をする時まで待てないのですか」

「そんな悠長に待たれるか。子供の命がかかっているんだぞ」

「時は来ています。神楽祭りの再開、それはスズンにとって過去の再来です。同じ状況にしないよう必ず、神楽祭りの前に全てを話します。自らの意思で話すまで待ってもらえませんか。これは友としての頼みです」ゲーゴルは頭を下げた。

霧崎は舌打ちをした。

センチは、霧崎の態度を見て不快な表情をした。警察官なのに子供じみた態度を取るとは大人げない。「森に入りたがっているようだけど、出られなかったら意味がないわよね」

霧崎は、センチの言葉に苛立った。「何だと」

「センチ、止めなさい」ゲーゴルはセンチを諭した。

「ごめんなさい、パパ」センチはゲーゴルに頭を下げた。

「センチの言う通りよ」樹沙羅はセンチを助けるように言った。「中に入って先はどうするの。大人でしょ、少しは考えたらどうなの」

霧崎は項垂れた。子供に説教されるとは思わなかった。

「その通りです。まだ入り口に立ったに過ぎません。他にも資料がありますので、もっと調べてはどうですか」

「まだあるのですか」

「ええ。倉庫に溜まっています。元々GHQが保管するものでしたから、持っていても構いません」

ゲーゴルは立ち上がった。「では、私は警察の方と倉庫に向かいます」

ゲーゴルはドアに向かい、開けると去っていった。

「あの、帰りはいつ頃になるんだ」霧崎は、樹沙羅に尋ねた。

樹沙羅は、センチの方を向いた。センチは困惑していた。

「あの、どうして私が関係あるのですか」

「いえ、遊びに行くって言ってたから。いつ帰るのかと」

「なら夕方までです。日が暮れるの早いですから」センチは吐き捨てるように言った。

「分かった」

「どうして、私が帰る時間を聞くの」

「警察署への戻りついでだ、送っていく」

樹沙羅は不快な表情をした。

「逮捕する気はないし、やましい事もしない。こう見えても妻子持ちだ。加えてな」霧崎は気だるそうな表情をした。「夜勤明けで、寝てない上に余り食べてないんだ。余計な真似をする体力はない」

「食べていないから、クッキーを全部持っていてもいいですよ」ゲーゴルは笑みを浮かべた。

霧崎は苦笑いをした。「全部食べても満たされないとします」

「関連性のある資料を引っ張り出すのは部外者ではなく身内にしか出来ません。詰め込んだ当人にしか場所が把握出来ませんから、暫く休んでいて下さい」

「はあ」霧崎は曖昧な返事をした。

「警察に倒れられると、こちらとしても余計な疑いを掛ける事になります。妻子持ちなら分かるでしょう。貴方は一人ではありません。体を調えるのも立派な義務です」

「分かった。飯食いに行ってから駐車場で休ませてもらう」霧崎は気だるそうに言った。

「終わったら、貴方を起こしたのと同じように呼びに行きます」

「はい」霧崎は素直に返事を返した。

「私はタクシー代が浮くからいいけど、何か胡散臭いわね」

「だから、やましい事はだな」

「そういう意味じゃないわよ。「犯罪に関する考えじゃないから、安心なさい」

霧崎は唸った。子供と言うのは何を考えているのかよく分からない。「ああ、そうだ。近くに飯屋はあるか。赴任してから1月も経ってないんだ、まだ場所がよく分からなくてな。地図には神社や教会やらは書いてあるんだが、如何せん飯屋というのは書いてなくてな」

「国道沿いに行けば、大抵何かあるわよ」センチは適当に言った。

「そういうものか」

「そうよ。何もなかったら、皆食べるものに困っているじゃないですか」

「適当にもほどがあるわよ」センチにの態度に、樹沙羅は呆れ気味に言った。「大通りを歩いて行くと、父符神社が見えるわ。参道の商店街で食べるといいわ」

「分かった。感謝する」

霧崎は部屋を出て行った。

「私も資料を整理する必要がありますから、この辺で」ゲーゴルは席を立った。

ゲーゴルは部屋を出て行った。「ミリア、後片付けをお願いします」ゲーゴルの声が廊下から響いた。

「はい」ミリアの返事が聞こえた。

センチはクッキーの入った皿を持った。「じゃあ、私の部屋に持っていきますね。樹沙羅お姉様も私の部屋に来て下さい」

センチは部屋を出ていった。

樹沙羅は部屋に誰もいない事を確認し、ドアを閉めてセンチの後をついて行った。

霧崎は玄関に向かった。土間にある靴に足を入れた。

「大して役に立てないようで、申し訳ありません」

「いえ。寧ろ有用ですよ」霧崎は頭を下げた。

ゲーゴルも頭を下げた。

霧崎はドアを開けた。「また戻ります」霧崎はドアを開けて出ていった。

ゲーゴルはドアが閉まったのを認めると、靴を手に取り踵を返して廊下を歩いて勝手口に向かった。勝手口は薄暗く、くたびれた箒やちりとり、バケツが脇に置いてあった。壁にはキーを駆けておくフックが付いていた。

ゲーゴルは勝手口の土間に靴を置き、履くとキーの一つを手にとってドアを開けた。先には白塗りの物置小屋が置いてあった。

ゲーゴルは物置小屋の扉の前に来ると、キーを鍵穴に入れて回した。

鍵が開いた感覚を覚えるとキーを抜いてドアを開けた。

中は暗く、重なっている段ボール箱の群れと棚があった。ダンボール箱には英語で書かれたラベルが貼ってあり、中には冊子の切り抜きやノートが入っていた。棚の中にも同じ物が詰まっていた。

ゲーゴルはラベルを確認しては段ボール箱を区分けし始めた。

霧崎は駐車場に置いてあるパトロールカーに向かうとキーを差し込み、ドアを開けた。

霧崎は助手席に置いてある地図を開き、父符神社近辺を見た。教会が接している大通りの先に父符神社があった。正面入口は交差点になっていて、先には参道と書いてあった。

霧崎は地図を助手席に投げるようにおいてドアを閉めた。車で行くか考えたが、私用でパトロールカーを使う気にならず、今の状態で運転すると居眠りして事故を起こしかねないのでやめた。

霧崎は大通りを歩いていった。警察官の身なりは目立つ格好で、すれ違った人達は皆振り返って霧崎を見ていた。

霧崎は気に留めなかった。空腹と眠気から来る気だるさが、周囲を意識する余裕を与えなかった。

父符神社の前にある交差点に来た。参道に人通りがあり、土産物屋や飲食店が並んでいた。

霧崎はそばののれんが掛けてある店に向かい、扉を開けて中に入った。赤い木目を基調とした部屋で漆喰風の壁

紙が貼ってあった。奥に畳の座敷があり、手前に椅子とテーブルの席があった。座席にはカバンを脇に置いた客が固まって座り、そばをすすっていた。端の席が空いていた。

エプロンを着た女性店員が霧崎に気づき、近づいて頭を下げた。「いらっしゃいませ、警察の方ですか」「今は只の飯ですよ」霧崎は店員に気さくに答え、空いている椅子の席に座った。

店員は厨房のカウンターに向かい、置いてあるピッチャーからコップに冷水を入れると霧崎のテーブルに置いた。「せいろそばを」

「はい」店員はエプロンのポケットから伝票を取り出して霧崎の注文を書き込んだ。

「聞きたい事があるんだけど、いいかな」霧崎は、店員に尋ねた。

「何でしょう」

「父符神社には、立ち入り出来ない森というのがあるかな」

「森、ですか」店員は、霧崎の質問に眉を顰めた。「確かに父符神社に立ち入り出来ない箇所はありますが、森という程茂っている場所はありません」

「神社がどうかしたんかい」女将らしき中年女性が、厨房のカウンターから顔をのぞかせた。

「横乃瀬村の八想神社の森が立ち入り出来ないと言われてたんだ。同じような森が父符神社にもないのかと思ってね」

「神社の森ってのはみんなそういうものだよ。森を守るために神社があるんだからね」

「物理的に入れないと言うのは。例えば結界を張っているというのは」

「物理的だか結界だか分からないけど、拝殿の奥には柵があるんだから入れない。そういうものだよ」

霧崎は唸った。結界が一般的に知られているのは八想神社近辺だけらしい。「横乃瀬村には大宮から派遣された神主が化け物を追い込んだと言う伝承があると聞きました。似た伝承はあるのですか」

「いや」中年女性は首を振った。「そんな話は聞いた事がないね」

「どうも、ありがとうございます」霧崎は頷いた。「大宮とは、方向が違いますしね」

中年女性は笑った。

観光客や霧崎は驚いた。「どうしたんですか」

「大宮って、大宮市の事だと思ってるのかい。横乃瀬から見た大宮ってのはここだよ。大宮ってのは地域で一番大きい神社の事を言うんだ」

「じゃあ、ここから横乃瀬に神主が派遣されたと」

「実際どうだか分からないけど、あたしは知らないよ。周りもそんな話を知らないんじゃないかな」

霧崎は眉を顰めた。伝承は時と共に薄らいでいく物だが、観光客に尋ねられる事もあるので断片的に知っているはずだ。

「伝承自体、存在しないのですか」

「分からないって言ってるよ。神社に直接尋ねればいいよ。記録が残っているはずだからね」

「あの、そろそろ行きますがいいですか」店員は霧崎に尋ねた。「構わない」

「はい」店員は頷き、厨房へと去って行った。

「何かあったのかい」

「いえ」霧崎は首を振った。「横乃瀬で変わった伝承を聞いた物ですから、本当なのかと思ひまして」

「伝承なんて適当だから、余り真に受ける物じゃないよ。知った所でどうにかなる訳じゃないんだからさ」中年女性は顔を引っ込めた。

霧崎は眉を顰めた。伝承がないとなればどちらかが嘘を言っている事になる。とはいえ、中年女性の言う通り伝承と言う物に信ぴょう性はないので矛盾があっても仕方がないのかもしれない。

暫く経った。店員がせいろそばと伝票を持ってきた。つゆの入った瓶と薬味の入った皿も一緒に沿えてあった。

霧崎はテーブルの中央にある箸入れから割り箸を取り出して割り、せいろそばをすすった。かえしが強く、味が濃かった。

霧崎はそばを食べ終わると伝票を手に取り、レジスタのある台に向かった。

店員がレジスタのある台に向かった。

霧崎は伝票を店員に渡した。

店員は伝票を受け取り、レジスタに打ちこんだ。レジスタの戸が開いた。

霧崎はレジスタの表示窓に映っている数字を見て、胸ポケットから財布を取り出して札を出して店員に渡した。

店員は釣りを渡した。「ありがとうございました」

霧崎は財布に釣りを入れ、胸ポケットに入れると扉を開けて出て行った。日が傾き始めていた。

「もうこんな時間か」霧崎は参道を歩いて大通りに向かった。先には、父符神社の赤い鳥居があった。

霧崎は時計屋の前に来た。ショーウィンドウに青い縁のベルが付いた目覚まし時計が置いてあった。

霧崎は顎に手をあてて目覚まし時計を見つめた。暫く考えた後、時計屋の扉を開けて中に入った。